

ぐだ子と新宿オルタズ と異世界特異点

さんあめま

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人理修復を達成し、四つの亞種特異点を攻略して、藤丸立香とカルデアにつかの間訪
れた平穏。

しかしレイシフトシステムに突如バグのように発生したプログラムによつてその平
穏は消え去つた。

詳細不明の行き先。

連れていく戦力は二騎。

名乗りを上げるジャンヌ・オルタとアルトリア・オルタ。

息をするように仲良く喧嘩する二人を前に立香は心の中で「助けてマシユ」と叫ぶ。

ダ・ヴィンチちゃん 「大丈夫大丈夫。これギヤグイベだから」

3
話

2
話

1
話

目

次

22 12 1

1話

南極大陸に魔術的に隠蔽された標高6000メートル級の名もなき山脈。

そしてその山頂付近に居を構える人理保障機関カルデア。

白磁の建物の一角。ブリーフィングルームと呼称される一室で二つの人影が会話をしていた。

「コフインに不具合?」

一人は十代後半の茶髪の少女、藤丸立香。

元人類最後のマスターにして、魔術王の企みを阻止し、人理修復を成し遂げた者。
そしてもう一人は、

「そうとも」

びんと人差し指を立て、立香と向き合い説明する女性。

見た目には眼鏡の似合う知的な美女。

しかしてその実態は自らの肉体を理想の女性に作りかえた偉大なる変質者、召喚例第

3号。

サーヴァントキヤスター。万能の天才、ダヴィンチその人である。

「天才を持つてしても出所不明のプログラムが混入していてね。どうやらどこかにレイシフトされるようだが、詳細を調べようにも何度も解析を試みても弾かれる。全容を見るには一度プログラムを走らせてみるしかない、というワケさ」

「大丈夫なのかな、ソレ」

罠の確率が高い正体不明のものをわからないまま使う、というのは随分と豪気が過ぎるような気がする。

差し迫った状況ならばともかく、余裕があるならば回避したい。

君子ナントカともいいうし、と立香は考えた。

「大丈夫、とは言いきれないけれど、何時また亞種特異点が発生するかもわからない。万全を期すためにも不確定要素は取り除くべきだし、処理作業にはカルデアがビジー状態でない時に臨みたいのさ」

「確かに」

コフインはレイシフトの際、安全に深く関与するものだ。

レイシフトは一度実行してしまえば帰還まで中断することはできない。不測の事態

が頻発する特異点攻略に不安要素を抱えたまま向かうというのも良くない。
今のところ五つ目の亞種特異点は現れる兆候はないが、事前準備だけは怠るべきではないだろう。

「それに、科学、魔術のありとあらゆるアプローチを試した結果、敵意や害意は含まれていないだけは確認できた。どちらかといえば毎年恒例のハロウインのような反応だね」

「それは、地獄、では？」

人理修復中に二度。修復後に一度。

累計三度経験したハロウイントリロジー。

その消し去ることのできない記憶に立香は背筋をぶるりと震わせた。

「こちらから連れていけるサーヴァントは二騎。それ以上を連れていくとプログラムは作動しないらしい。メンバー選抜は立香ちゃんに任せよう」

「一人か……」

立香の脳裏に想起されるカルデアのサーヴァント達。

詳細不明の状況で連れていける戦力は二人のみ。

単純戦力、状況適応力、優先させるべきは何か。

よく考えて判断しないといけない。

立香は腕を組み、片方の手を口元に当てた。

長く思考する際の癖だ。

と、

「へえ…面白い話をしてるわね」

突然の第三者の声に二人は振り向く。

「……！ ジャンヌ！」

ブリーフィングルームの入り口に立っていたのは見知った黒衣の女性だつた。

ジャンヌ・オルタ。

ジル・ド・レエによつて聖杯から産み出された、聖処女ジャンヌ・ダルクの贋作。

初めて出会つたのは第一特異点オルLEAN。

邪魔を従える魔女——敵として、カルデアと立香の前に立ち塞がつた。

カルデアで召喚されたサーヴァントに加え、現地のサーヴァントの協力もあつてなんとか撃破。

そこからクリスマス、贋作回収騒動を経て糺余曲折の後、カルデアに召喚された。

始まりこそ敵同士ではあつたが今となつては大切な仲間の一員だ。

マスターとサーヴァントとしての関係は比較的良好。

常に斜に構えたようなスタンスで口では文句ばかりだが、なんだかんだと付き合いは良い。

日頃の態度からか、忠誠心の高い他のサーヴァントからの印象は良くないが、元より立香は杓子定規な主従関係などに固執するつもりはない。

むしろ彼女の気安い態度を好ましいとさえ思つてゐる。

そんなジャンヌ・オルタの今の格好は、ファー付きの黒いコートに白いふとももが眩しいタイトなミニスカート。

以前解決した亞種特異点新宿。

その時のジャンヌ・オルタが着用していた衣装だ。

カルデアに召喚されている彼女は新宿のジャンヌ・オルタとはまた違う存在なのだが、カルデアのデータベースで新宿での記録を見てから後、かの地での装いを自作（!!）し、気に入つたのか度々着るようになつた。

尚、映像記録に残つていない部分——新宿から退去する際の詳細を立香から無理矢理聞きだし、異なる自分がしでかした事にしばらく身悶えた後、何やら創作活動に励んでいたとの報告が上げられている。

「丁度ネームに行き詰まつていたのよ。マスター、私を連れていきなさい」

「それは、願つてもないことだけど」

性格上の問題か矢鱈と力押しを好み、火力一辺倒のきらいはあるがその火力こそが破格。

気分屋故に扱いには注意が必要だが、戦力としては申し分ない。

何よりルルハウでの度重なるループを共に乗り越えた仲だ。
ついてくるというのなら頼もしい。断る理由はない。
と、

「ほう、廊下の先から田舎娘の声がしたと思えば：随分と面白い話をしているな」
「げ」

愉悦に歪んでいたジャンヌ・オルタの顔が一瞬で苦虫を噛み潰したかのような表情に
変わる。

「あ、アルトリア」

続いて現れたのはアルトリア・オルタ。

かの騎士王アルトリア・ペンドラゴンの別側面。

アーサー王の苛烈な為政者としての部分を強調された存在だ。

ジャンヌ・オルタと同じくファーストコンタクトでは敵として立ちはだかつたが、特
異点X冬木を攻略して後、直ぐに召喚に応じてくれたカルデアでも古参に位置するサー
ヴァント。

立香にとつては共に人理修復を成した大切な仲間の一人であり、ジャンヌ・オルタと
は第一特異点からの因縁である。

余談だが、カルデアに召喚されたこのアルトリア・オルタ。

サンタにメイドとなにかにつけてはコスプレを嗜むようになり、最近ではバニーストーツに興味を示しているようだ。

見れば彼女も新宿での衣装を身に纏っている。

薄手のキャミソールにフード付きのパーカー。

いささか短過ぎる程のショートパンツにハイブーツ。

黒一色だが金の髪と白い肌にとてもよく似合っている。

「えつと…色々と聞きたい所はあるけど、まずその服どうしたの？」

「これか？・ヴラド公に作らせた」

指先で見せつけるように肩紐をつまみ上げ、アルトリアは答える。

立香に言及されたのが嬉しいのか、どことなく上機嫌な様子だ。

「呆れた。趣味のものを作らせるなんて、王サマはやることが違うわね。しかもそれ、要するに私のパクリでしょ」

しかしその機嫌もジャンヌの言葉によつて急降下。

こめかみに青筋を浮かべながら言い返す。

「ふ、流石は聖処女の贋作モドキ。言うことが違う。そもそも記録を見る限りあの特異点ではお前こそが私の後追いだったようだが？」

「あれは私だけど私じゃないから関係ありません。ノーカンよ、ノーカン」

そして始まつたいつもの言い合い。

ラリーの度に際限なくヒートアップしていくやり取りは新宿でもカルデアでも何度も経験した。

放つておけば何時まで経つても話がすすまない。矛先を変えさせるため、立香は口を開く。

「それで、さつきの話を聞いてアルトリアはどう思つたの?」

「む、そうだ。思わず本題を忘れる所だつた。貴様のせいだぞ」「はあ? アンタの頭の出来の悪さを私のせいにしないでくれる!?

打てば響くとはこのこと。

些細な火種に即座に反応、爆発。

二人の間はまるで火薬庫である。

「この狂犬女だけではマスターが危うい、私もついていこう」

そしてアルトリアによつて投げこまれる新たな火種。

流れからして半ば予想していたことではある。

そしてこれから起きる出来事もある程度予測できる。

立香は固まつたような笑顔のまま汗を垂らし、ダヴィンチは色々な事を諦め、考えるのをやめた。

「はああああ!? 冗談じやないわ、お呼びじやないっての!」

「それを判断するのはお前ではない、マスターだ」

アルトリア・オルタもまた、戦力としては申し分ない。

好む戦法はジャンヌ・オルタと同じく真正面からの力押しだが、低ランクとはいえ直感スキルを保持しているのと、王としての経験から戦闘中においても常に冷静。

必要とあらば搦め手を使うことにも躊躇はない。

彼の戦力差の計算や引き際に関しても信頼できる。

事実、立香は人理修復の最中何度もその判断に助けられた。

ジャンヌ・オルタにアルトリア・オルタ。どちらも立香にとつては信頼を寄せるに値するサーヴァントなのだが……。

「だからあんたは来なくていいのよ、後輩ちゃんを連れていくから。マスターに私、あと後輩ちゃん。完璧な面子ね」

「問題大アリだ脳筋女。マシユは今サーヴァントとしての力を發揮できない、忘れていたのか貴様」

「それでも足を引つ張らない分、アンタよりは余程マシよ」

「何……?」

「なによ」

この二人、もの凄く仲が悪いのである。

顔を合わせれば直ぐ言い合い。

そのくせお互いがお互いになにかと突つかかる。

もうこれは逆に仲がいいのではと勘織りたくなる程だ。

「キリがない……こうなつたらマスターに決めてもらう。異論はないな？」

「上等」

「へつ？」

付き合つてられないとばかりに、しゃがんでこつそり部屋を抜け出そうとしていた立香に突如矛先が向いた。

「というわけで……」

「選べマスター。この突撃女と私、どちらを連れていくのかを」

「そうよ、選びなさい。この冷血女と私、どちらを連れていくの？」

「え？ え？ つと……？」

何時の間に話が変わつたのやら、どちらか一人を選択して連れていいくことになつてゐる。

どうしてこの二人はこういう所だけ息が合うのか。

見下ろされた状態の立香は頭を抱えたくなつた。

「私よね？」

ジャンヌが逃がさないと言わんばかりに、立香を挟んで壁に左手をついた。至近距離で目にした金の瞳にどきりと胸が鳴る。

「いいや、私だ。——そ、うだらう、マスター？」

思わず横に逃れようとした立香を、さらにアルトリアが追い詰める。耳に直接囁くような言葉に背筋がぞくりと震えた。

そして塞がれた逃げ道。

ジャンヌが左手、アルトリアが右手を顔の横につき、挟むように追い込まれた立香。彼女の前に陣取り、早く選べと催促してくる二人。

「さあ

「どつち」

(た、助けてマシユ!)

二つの整った顔にぐいぐいと迫られ、立香はパニックに陥り、心の中で頼れる後輩に助けを求めた。

2話

人間離れした二つの美貌を前に立香はテンパつていた。

(こんな壁ドン嬉しくないってば!)

立香に同性愛のケはない。

いかに女の子の理想のシチュエーションだろうが、はつとするとほど美しかろうが、女性に言い寄られたところで困ってしまうだけである。

さらに人理修復を経験した歴戦のマスターとしての経験が警告している。
どちらを選んでも口クなことにはならない、と。

どうしたものかと壁に背を張り付けながら思考を回す。

(――はつ！ そういうえばここには頼れる天才がいた！)

起死回生の一手。

この部屋に居るもう一人の存在を思いだした立香は、ダヴィンチに視線を投げかけ助けを求める。

立香の視線によるSOSを受けとったダヴィンチは、
(了解、任せててくれたまえ)

「こくりと頷き、

「うん、喧嘩する程仲がいいとはよく言つたものだね。美しきかな友情。これはもうこのメンバーでレイシフトするしかないようだ」

(この裏切りもの!!)

火に油を注ぐ言葉。

立香がジト目で睨むも、ぴゅーぴゅーと口笛を吹きながらふい、とそっぽを向かれた。
「ちよつと、ダヴィンチ。あんた目が腐つてんじやないの？」

「不本意だが同感だ。この女と友情などあるわけがないし、喧嘩など発生しようもない。何故なら争いとは同レベルの者の間でしか起こらないからだ」

「へえ、アンタにしてはまともな事言うじゃない。当然、私が上つてことよね？」

「フツ（鼻で笑う）」

「——買ったわ、その喧嘩」

「いいだろう、かかつてこい」

立ち上がり、それぞれの手に邪魔の旗と、黒く染まつた聖剣。

自らが敵を撃滅するための獲物が現れた。

双方が向かい合うと同時に漏れ出る、可視化するほど濃密な魔力。

まさに一触即発。

凄まじくくだらないことが原因で、カルデアの終末時計が十二時を示そうとしている。

振り上げられる凶器。

もう、猶予はない。

「はい！先に手を出した方は連れていきません！！」

強気の一手。

我慢の限界とばかりに立香が拳手しながら宣言する。

ぴたりと静止する二つの武器。

「……」

遅れて発生する無言でのにらみ合い。

「ちよつとアンタ、今だけなら一発くらい我慢してあげるけど」

「殊勝な心がけだな、単細胞。あまりに短絡的で涙が零れそうだ」

「——潰す」

「構わんぞ。お前の居残りが決定した瞬間、即座に反撃するが」

「ぬぐつ

手にした聖剣を下ろし、余裕の笑みを浮かべるアルトリア。

手にした旗を振り上げたまま怒つたり悔しがつたりと百面相をするジャンヌ。

先程よりはどこか弛緩した空氣に、ひとまず直近の危機は去つたらしく立香は息をついた。

そして間隙をつくように、すすすと立香の横に寄ってきたダヴィンチが口を開いた。
「どうかな立香ちゃん。どちらか一人取り残した場合、カルデアに大惨事が待ち受けて
いると思うんだ」

「うん……」

ダヴィンチの言葉に全力で同意する。

立香は二つのパターンを脳内でシミュレートした。

アルトリアを連れて行つた場合。

イライラを隠しもせず大荒れするジャンヌ。

そして憂さ晴らしに付き合わされ進まないおつきーの原稿。

ジャンヌを連れて行つた場合。

八つ当たりのように食堂の備蓄を食い荒らすアルトリア。

そして丁寧に作つた料理を不味いと一蹴され背中に哀愁を漂わせるエミヤ。

どちらの光景も立香にはありありと想像できた。

おつきーの原稿とエミヤの料理人としてのプライドを守るため、これはもう、覚悟を
決めるほかないだろう。

「わかった。両方連れていく——けどレイシフトの前にマシユの所に寄らせて」「もちろん。構わないさ」

覚悟を決めた険しい表情のまま、オペレータールームに向かう。扉を開けると、

「あ、先輩。レイシフトの準備は完了です、いつでもいけますよ」

振り向いた、カルデア制服の上からパーカーを羽織った少女。

薄紫色の髪に、前髪と眼鏡の奥からのぞくアメジストのような瞳。

そこに待っていたのは立香にとつての天使だった。

「それで、やはり今回も私はついていくことができないみたいで——ごめんなさい、先ば
「マシユ〜!!」

認識した途端、一瞬で顔が緩む立香。

神妙な顔をしてぺこりと頭を下げた後輩に、一も二もなく飛びつく。
勢いのままに両腕でぎゅう、と正面から抱き締めた。

「へ？きやつ、せせせ先輩！」

突然の奇行に可動域の制限された両手をわたわた振り、慌てふためくマシユ。そんな彼女を他所に立香はたわわな胸元に顔をうずめた。

肺いっぱいにマシユの匂いを取り込む。

薄く柔らかな匂いは疲弊した立香の精神を安定させてくれた。

「あ、～、癒される～」

「密着！すごく密着してます先輩！」

「よいではないか～」

「よくないです、見られます！先輩！皆さんに見られますからっ！！」

マシユの言葉のとおり、スキンシップにしては少々過激にすぎるその光景を背後から眺める視線が三つ。

（いくらなんでもそれでノンケは無理があると思うよ、立香ちゃん）

（もう、やはりまだマシユの方が強いか）

（後輩ちゃん、やつぱり手強いわね）

「あ、先輩！ダメっ！ダメですってば！」

「ふー、堪能した」

一仕事終えたとばかりに額の汗をぬぐう。

「もう……先輩ひどいです」

ずれた眼鏡と若干乱れた着衣を整えながら、マシユはジト目で立香を睨んだ。「ごめん、ごめん、また少しの間会えなくなると思うとつい」

「——」

少しの寂しさを感じさせる声。

マシユの脳裏をよぎつたのは、共にのりこえた七つの特異点と、離れた場所で見守ることしか出来なかつた三つの亞種特異点。

セイレムでは共に困難に立ち向かつたが、今度はまた、立香は手の届かない場所に行つてしまふ。

共に向かうジャンヌ・オルタとアルトリア・オルタが少し、羨ましい。

傍に居られない自分と、傍に居られる二人。

ちくりと胸を刺す痛みを、マシユは顔に出さず、

「精一杯、サポートしますね」

笑顔で立香を送り出す。

「——うん、頼りにしてる」

立香もまた、笑顔で応えた。

更衣室で身体にぴっちりと張りつく黒と橙を基調とした戦闘服に体を通し、
(これを着るのちょっと恥ずかしいんだけど、つと)

カルデアスの前に移動。

オペレーター達の見守る中、藤丸立香、ジャンヌ・オルタ、アルトリア・オルタがそれぞれにコフィンに乗り込む。

体調は万全、気合い十分、覚悟も決まつた。
準備は完了。

あとはレイシフトの瞬間を待つだけだ。

「仮のポイントは比較的簡単にレイシフトできる場所、1800年代のロンドンに設定しておいたよ。けれど実際は何処に向かうかわからない。いきなり水中や土の中つてことはない筈だけど」

「空の上なら何度があつたね、ふふふ」

「ああつ、先輩のメンタル値が低下していきます!?

「おつと藪蛇だつたかな。おおよその注意点は先程説明したとおり。リソースを削る必要があつた時、我々は何よりも君の存在証明を優先する。場合によつては通信が一時的に通じなくなるかも知れないが——まあ、いつものことだね」

「うん、わかってる」

不足の事態なんてものは日常茶飯事。

レイシフト中にカルデアとの通信が途絶したのも一度や二度のことじゃない。予測不能の事態が起きた上で、手持ちの情報を元に、どう判断し、どう行動するのか。何度もやつてきたことだ。困難に立ち向かうことだけには、自信がある。

立香の落ち着いた様を見て、ダヴィンチが優しく笑う。

(本当に、随分と頼もしくなったものだね)

「ならば良し。それじゃあ早速行こうか！ 実証開始！」

その言葉とともに立香の身体は靈子と化した。

内部が未確定となつたコフインの前でオペレーター達によつて次々と状況報告がなされる。

そのうちの一つ、

「レイシフト先の座標がリアルタイムで変更されています！」

待つていた情報にダヴィンチが食い付く。

「おつと早速來たか。どれどれこの座標は、つと——」

そして羅列された数字に目を通した後、お手上げとばかりに額に手をやつた。

「——参つたなこれは」

「せ、先輩は何処に向かつたのでしょうか、ダヴィンチちゃん」

ダヴィンチの様子にマシユが思わず追求する。

彼女の見ているデータ、藤丸立香のバイタルデータは変わらず正常な数値を吐き出している。

少なくとも、直接危機的状況にあるわけではない。

「うーん。まだ確証が持てないことが多いけど、とりあえず、わかっていることが一つだけ」

額に当ていた手を離し人差し指を立てて、マシユにデータから導き出された、その結論を話す。

「彼女達が向かつたのは、地球上には存在しない場所だ」

3話

「よくぞ私の声に答えてくれました。異世界の勇者様方」「へつ？」

レイシフト直後の立香達を謎の声が迎える。

聞こえてきた突飛な言葉はひとまず捨て置き、まずは状況の確認。ジヤンヌとアルトリアは直ぐ傍に、立香と同じように立っている。外傷、拘束は存在しない。

二人とそれぞれ目線を合わせて意志の疎通を行う。

必要とあらば即座に戦闘体制に入ることができるだろう。

次に視線をずらして周囲を見れば、白塗りの世界が延々と続く不可思議な空間。一切の染みもなく、只ひたすらに白一色。

縦にも横にも広大な空間に、立香達がまるで異物のようにぽつんと在る。全くもつて見覚えのない景色。

しかしこの突拍子の無さは時間神殿に通じるものがある。

またどんでもない出来事に巻き込まれたのだろうか、などと立香は想像した。

「混乱するのも仕方がないこと、ですがまずは私の話を聞いてください」

再び響く謎の声。

立香は相手が何処にいるのか周囲を見渡し、

「ねえ、なんか妙に聞き覚えのある声なんだけど……私の気のせいいかしら」

「奇遇だな、私も同じことを考えていた。今まさにお前の口からその声が聞こえた所だ」
一騎の英靈は嫌な予感に苛まれていた。

「こちらです、異世界の勇者様方」

立香が背後を振り向く。

そこには、立香達の見知った顔がいた。

長い金の髪を三つに編み、白磁の肌と青い瞳。白い布のような服に身を包んだ、聖女の
ような、

「私はこの世界を守護する女神「ちよつと、なにやつてんのよアンタ」

相手を認識すると同時に、ジャンヌが即座に食つて掛かる。

「自ら聖女を名乗るのはまあギリセーフとしても、流石に女神を自称するのはアウトよ、

アウト」

女神を名乗る者に対してはあまりに気安い言葉。

だがそれも当然のことだろう。

(聖女のような、つていうか聖処女だ)

そこに居たのは神々しい白の衣装を纏つたジャンヌ・ダルクその人だつた。

「え？ えつと……自称？ ではなく私は本当に」

突如遮られたことに目をぱちくりとしながら困惑し、再度自らの事を説明しようとすると自称女神のジャンヌ。

「もうその設定はいいつての。まったく、姉がそんなど私まで変な風に見られるんだから。ホント、気をつけてよね」

(ナチュラルに姉呼びしてる)

(洗脳はまだ解けていなかつたか)

しかしそれも遮られる。

そして何の疑問もなく姉と口にするジャンヌに、立香とアルトリアは聖処女の洗脳の強力さを思い知つた。

「それで、こんな所でなにやつてんのよ」

「何つて……で、ですから私は本当に女神——というか姉つてなんですか!?」

「——い！——ぱい！——先輩！聞こえますか、先輩！」

と、立香の左手首につけられた腕輪から、マシユの声が響く。謎の空間に居るが、どうやら未だ通信は行えるらしい。

少し安心しながら立香は右の人差し指で腕輪に触れ、通話機能をオンにした。視界の端ではジャンヌとジャンヌ（女神）が未だにやいのやいの言い合っている、「もしもしこちら藤丸立香、感度良好。こつちは無事だよ、マシユ」

「——つ、無事でよかつたです、先輩！」

「うん、今のところはね」

「よかつたよかつた、一時はどうなることかと」

「その声はダヴィンチちゃん。えつと、どんな問題があつたの？」

「うーん。なんというか、立香ちゃん達の居る座標がね」

「うん」

確かに変な所にいるなあ、と立香は続く言葉に身構え、

「地球上に存在しないんだよ」

「…………わつつ？」

投げかけられた予想外に、意識が一瞬空白と化した。

「やあ、ミス藤丸。ダヴィンチ女史は送られてくるデータの処理に忙しい。なのでここからは私が解説しよう」

「ホームズ！いたの!?」

先程まで会話していたダヴィンチと入れ替わるように、神経質そうな男性が通信に出る。

シャーロック・ホームズ。

世界一有名な私立探偵であり、カルデア随一の知患者だ。

人理修復中は独自で行動していたが、新宿攻略後にカルデアに合流、新たなブレインとなつた。

なお同時期に召喚されたモリアーティとは度々物騒なジョークを飛ばしあつている。
「日課の瞑想が終わつてね、先程私も管制室入りした所さ」

（この私立探偵、またおくすりキメてたんだ）

思わずジトつとした表情になるが、おそらくは伝わつていなかろう。
もつとも伝わつた所ではははと笑い飛ばされるだけだが。

「協議の結果、今現在ミス藤丸達が居る場所をひとまず〈異世界〉と呼ぶことにした」
「異世界？」

なにやら聞き慣れない単語に立香は首を傾げる。

未だ勉強不足だが、カルデアのキヤスター陣の協力もあつてか魔術の知識だけはそれなりになつてきた所。

しかし異世界という言葉には馴染みがない。

「空間や時間ではなくそれ以外の何かで隔絶された、本来ならレイシフトを持つてしてもたどり着けない場所ということだよ。今回は混入していたプログラムが案内役となつたようだね」

「それって平行世界とは違うの？」

「ああ、違う。カルデアの設備では、平行世界を観測することは出来ない。しかしこちらではミス藤丸達をしつかりモニターできている。つまり平行世界ではないということさ。魔術世界ではついぞ使うことのない単語だが、今回は便宜上そう名前をつけさせて貰つた」

「なるほど」

「そんなのはどうでもいいのよ！」

突如声を荒げたまま、通信に乱入してくるジャンヌ。

ジャンヌ（女神）と口論するように話していくが、決着はつかなかつたのだろうか。

「そつちでも確認できてるんでしょう？なんであの駄姉がここに居るのか、その説明をしなさい！」

「駄姉て」

「どれだけ言つても女神を自称するのをやめないのよ!? あんなの駄姉で十分よ!」

「ふむ、いいだろう」

と言つて、パイプを吹かす音。

一呼吸の後に、ホームズは再び口を開いた。

「といつても結論はとてもシンプルだ——彼女はジャンヌ・ダルクではない」

「は?」

鳩が豆鉄砲をくらつたかのような、見事なまでの呆け顔。ジャンヌが全く予想していなかつた結論のようだ。

「ちよつと、それはどういう……!」

即座に食つて掛かるジャンヌ。

しかし、気持ちとしては立香も同じだ。

女神を自称する彼女の見た目は完全に、第一特異点で協力し、後にカルデアにて召喚された聖処女ジャンヌ・ダルクそのものだ。

別人と言われても、はいそうですかとは納得できない。

それはホームズも理解しているようで、一つずつ、証拠を提示するように根拠を話し始めた。

「カルデアに召喚されたジヤンヌ・ダルクの靈基は今も確かにカルデア内に存在するし、何より観測する限り彼女の反応は英靈のソレではない」

「じゃ、じゃあ生前の……？」

「それも違う。彼女は人間でもない。反応としては神靈に近しい。しかしイシュタルやパールヴァティーなどの疑似サーヴァントでもない。——つまり彼女の自分は女神である、という話は本当のことだろう」

「うそ……」

「ミス藤丸は虚月館での出来事を覚えているかな？」

「虚月館っていうと——」

夢の中で起きながら、現実の世界ともリンクしていた不思議な殺人事件。

その事件の中で、立香は出会う人達を自らの知人と当て嵌めて認識していた。

「——つまり、私達が赤の他人の彼女をジヤンヌ・ダルクの姿で認識しているだけ、ってこと？」

「エクセレント。百点の回答だ。理屈は私も十全には説明できないが、状況証拠的にそれ以外は考えられない」

提示されたヒントから推察を述べれば、手放しの称賛を受ける。

しかし虚月館のあの現象は夢の中にあったから、のはずで……今のこの状況には当て

嵌まらないのではないか。

(ううむ……わからない)

そもそも虚月館の現象の理屈を、まったくもつて立香は覚えていない。

なんか小難しいことを言つていた気がする、程度の認識だ。

「じゃ、じゃあ。私は初対面の女神を姉呼ばわりした上、口論に及んだつてコト……？ ウソ……めちゃくちや恥ずかしい人じやない、ソレ」

視界の端でジヤンヌが呆然としながらシヨツクを受けていた。
羞恥のあまりか、両手で顔を覆つっていた。

——そつとしておこう。

立香は見なかつたことにした。

「ひとまず今を取り巻く状況は理解した。であれば次は何を成すべきかだ」

今まで静かに事の推移を見守つていたアルトリアが口を開く。

「今回のレイシフトの目的は正体不明のプログラムを暴くため、だ。その目的は達成した。安全を重視するのであれば直ぐに帰るべきだろう。女神とやらにかまける必要はない」

「当初の目的が完了すれば即撤退。ふむ、冷静な判断だ。——しかし、そういうわけにも行かないようでね、ミスアルトリア。その〈異世界〉にはいつもの反応がある」

〔いつもの
聖杯かあー……〕

立香は思わず肩を落とした。

聖杯があるのであれば暴走の危険性がある。放置するわけにはいかない。
不具合チエックのためのレイシフトは、今を持って聖杯回収の任務へと変わった。
であれば、まず行うべきは現地の人間との接触による情報収集。

立香はジヤンヌの見た目をした女神に、改めて話を聞くことにした。

「えーっと、長らくお待たせしたけど、もう一度お話を聞かせてもらつてもいいかな?」

二転三転の後にリスピボン地点に戻った気分。
置いてきぼりを食らっていた女神に近づき話かけると、なにやら決意に満ちた顔で直視された。

「ええ、はい。ない威厳を出そうとしたのが失敗でした。まさか初対面の人間に、女神を名乗るのはやめろ、と言われるとは」

思わず目をそらす。

(それ勘違いなんです、ごめんなさい)

自分がしてかした訳ではないとはいって、同じ勘違いを自分もしていた。

心中で、申し訳ないと立香は謝った。

「——回りくどいのは無しにして、ここは单刀直入にいきましょう」

すう、と息を吸い込み、女神はよく通る大きな声で宣言する。

「貴女方に、世界を滅ぼさんと企む魔王を、倒していただきたいのです！」

「魔王？」

「ふむ」

魔王と聞いて首を傾げる立香。

ヴォーティガーンあたりか？とアタリをつけるアルトリア。

そして、

「異世界…女神…魔王…まさか」

いつの間にか復活していたジャンヌ。

その手の文化に精通している彼女は、お約束ともいえる既知の展開に、これっていわゆるアレなのでは？と疑惑を膨らませる。

三者三様の反応を見せて、物語はさらにすすむ。